

Title	恩師 平良先生
Sub Title	
Author	森, 征一(Mori, Seiichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2012
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.85, No.12 (2012. 12) ,p.169- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 平良先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20121228-0169">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20121228-0169</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 恩師 平良先生

平先生との出会いは法学部法律学科三年生の時（昭和四一年）でした。私はゼミの指導教授であった田口精一先生のもとで、憲法のご指導をいただいております。しかし、先生がドイツに留学されることになり、四年生からは先生のご親友であった平先生のご指導を受けることになりました。田口先生から「これまでは私の研究対象であるドイツ連邦共和国基本法と比較しながら日本国憲法の研究指導をしてきたが、日本国憲法はアメリカ合衆国憲法の影響を受けているので、この機会に英米法の研究者である平先生のご指導を受けて、アメリカの憲法との比較を通して日本の憲法を見てみなさい」というご助言をいただき、平ゼミでのご指導を受けることになったのです。

当時は「皆殺しの良」という異名を取るほど、成績評価が厳しいと評判されていた平先生ではありませんが、先生の英米法の講義は、私にとって興味深くかつ楽しい

ものであったので、ご指導を受けることに抵抗はありませんでした。四年生の新学期が始まる前に先生にご挨拶をと思い、研究室をお訪ねしたところ、書架から分厚い英書三冊を取り出して、「これを読んでおくといいよ」と言われ、アメリカ憲法関連の本を手渡された時の驚きを今でも忘れません。

先生のお人柄に惹かれてでしょうか、私はしだいに先生とは、師でありながら友でもあるという不思議な関係になり、このような師弟関係を通して学問の面白さを知ることになりました。先生の質問に対して、私が答えられないときは、「田口さんの下で日本とドイツの憲法を勉強した君には、これは答えにくい問題かも知れないね。それは英米法ではこのように考えるんだ」と、先生はニコシしながらご指導して下さいました。私に研究者としての道を拓いて下さったのは、平先生だったように思います。

先生は、アメリカにおける連邦と州の法律問題を研究对象とされてきました。その関連からでしょうか、先生は欧州統合の問題に興味を示しておられました。先生はアメリカ合衆国とE.C.（欧州共同体）を重ね合わせていたのかもしれませんが、欧州統合が進む中で、E.C.法とE

C加盟国法との関係はどのようになるのか、法体系を異にする英国法（コモン・ロー）と大陸法（ローマ法）はどのように融合していくのか等々、英米法学者としての先生の欧州統合への関心は非常に強くなっていたと思われる。今、思い起こしてみると、私が、ヨーロッパ中世における帝国ローマ法と帝国内の都市コムローネ法の関係を法制史研究のテーマとするようになったのも、先生の影響かもしれません。

先生との思い出は尽きませんが、最後に、一つ、二つ、紹介させていただきます。私が法学部の教員に採用され、しばらくして、先生と研究室（新研）を隣り合わせることになりました。先生の部屋を挟んで向こう隣が田口先生の部屋でした。田口先生は平先生を頻繁に訪ねてこられて、いつも楽しげに話しておられました。両先生が親しかったのは、お二人が法学部法律学科を卒業した同期生であると同時に、陸軍と海軍の違いがあるとはいえず、ともに経理学校の出身であったということもあったようです。平先生の声はとても大きく、ひそひそ話も含めて、部屋での会話は私の部屋に筒抜けでした。お二人は慶應義塾のこと、法学部のことについていろいろと話しておられたので、私はいつの間にか塾内の情報通になってい

たものです。

もう一つ。私が平成三年から二年間イギリスに留学していた折り、先生ご夫妻がロンドンに旅行でいらしたことがありました。ロンドン滞在中、市内観光で名所旧跡を案内させていただきましたが、その大半は教会巡りでした。教会内部にお入りになると、先生は熱心にご覧になるので、教会一つ見終わるのに相当時間がかかりました。奥様は先生の後から遅れて、写真をつぎつぎ撮られるので、さらに時間がかかる。私はご夫妻がどうしてそれほど教会にこだわるのか、その時はよく理解できませんでしたが、ご葬儀での追悼の辞を聞いて、先生が敬虔なクリスチャンであったことを知り、はじめてその理由がわかりました。しかし、先生ご夫妻はそれでも見足りないかと、スコットランドへ教会を巡る旅に出られるというので、私が荷物を預かることになり、アパートの三階の私の部屋に持つて上がろうとして階段に足をかけたところ、突然、腰に強い痛みが走り、ぎっくり腰になってしまったことは、今は懐かしい思い出となりました。

帰国後、先生ご夫妻にはロンドンで撮った写真がたくさんあるので、ぜひ見に来て下さいと何度となくお誘いを受けましたが、忙しさにかまけ、それがかなわずに、

先生とお別れすることになってしまったことは、今と  
なつては返す返すも残念でたまりません。

名誉教授 森 征 一

## 平先生の思い出

——ご家庭における平先生——

夏休みと、お正月、ゼミ生は大挙して、平先生のお宅に何うのが慣例であった。先生は、お宅をお建てになつたとき、それを予定して、一番日当たりのよい居間に作り付けのベンチを用意なさつたと言う。ご家族にとつては、さぞや大変なことであつただろうと思うが、時に、二〇人を超す学生が、お宅の居間を占領することとなつた。その大量の学生を、奥様は、おいしい手料理でもてなしてくださつた。懐かしい思い出である。

平先生が法学部で教鞭をとり始めた時期は今よりずっと、さまざまの意味で、緊密な人間関係が存在していたように思う。その時代の雰囲気や、教員の様子を先生のお嬢様が、ご家族の観点からお書きになつたものを、ここに、引用させていただく。

### 蝶ネクタイの秘密

私の父との原風景は、夕暮れのアナーバーの散歩で